
～イノセンス～

長岡雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イノセンス

【Nコード】

N1583F

【作者名】

長岡雅

【あらすじ】

西暦25XX年、刹那・F・セイエイ、ロツクオン・ストラトス、アレルヤ・ハプティズム、ティエリア・アーデ、これらが連邦軍に所属しガンダムのパイロット、通称『ガンダムマイスター』として活躍した頃より200年後、世界は平穏な空気に包まれていた。だが、そんな平和な日々を打ち砕く影が忍び寄る。何も知るはずの無い主人公『ナイト・レン』だったが、ある事件をきっかけに戦いの渦へと巻き込まれていく。

第1話：平穏な日常

「つたく、遅いな…。」
少年がいるのは

「Magic」の入口前
「Magic」とは、
今でいう

ゲームセンターみたいな物だ

「お〜い！」
誰かが手を振ってきている

「んっ？お〜い！
こっちこっち！」

「悪い悪い、遅くなった。」

「遅すぎだろ、
もう30分は待ったぞ。」

「マジゴメン、
ちよつと
金持ってくるの忘れたから
取りに帰ってたんだよ。」

「だったら
わざわざ戻らなくても
ロボに任せりゃいいじゃん！」

「あ、そつかあ。
その手があったか。」

その手があったかつて、おい。

少年の名はナイト、

ナイト・レン

歳は15

正義感が強く、

何よりも仲間を大切にする。

この物語の主人公だ。

もう一人の方は、

アルバ・カーン

歳はナイトと同じく15

ナイトの幼なじみで大親友。

また、どんな人だって

コイツに勝てる奴は

居ないだろう

つてくらい天然っぷり。

おかげで幾度となく

ナイトを困らせている。

父親は大手企業の社長で、

ロボットの

製造・販売を行っている。

そして

ナイト達が今いるのは

通称

「サイド38」

円錐形のもものが2つ

対になってつながっている。

左右に

ソーラーパネルが広がっており

内部の電力を供給している。

これは、

宇宙衛星居住地

「コロニー」である。

これの製造計画に

アルバの父親の祖父

つまり曾祖父が一部加担していた。

「さて、それじゃ入ろうぜ。」

「お〜！」

そして2人は

「Magic」へと入っていった。

これから起こる惨劇を

知る由もなく…。

第2話：ブロークアウト

照明はついていないが
何かの情報や何やらが、
ビッシリと

書き込まれたものが光っている。

どうやらここは

コンピュータールームのようだ。

そんな暗い部屋の中

大きなイスに座り、

コンピューターを

見つめる男性がいた。

見た感じ40代ぐらいだ。

「大佐、戦闘準備完了しました。」

「分かった、下がれ。」

それとあとで向かうと伝える。」

「はっ！了解しました。」兵士は一礼すると、
そこを出ていった。

しばらくして、

『大佐』は口を開いた。

「さて…、

重い腰を上げるとするかな。」

カツカツカツ…、
廊下に『大佐』の
靴が進む音が響く…。

そして

ある扉の前で止まった。
そばには

『コマンドルーム』
と書かれている

扉は自動で開き、

『大佐』は
中へと足を踏み入れた。

「あ、大佐。

準備は完了しております。
いつでも飛べますよ。」

「ウム。」

『大佐』は
艦内アナウンス用の
ボタンを押した、

「これより出撃する！
世界に我らの威光を
示す時が来たのだ！

モビルスーツ
MS部隊は、

いつでも出撃できるよう
第一次戦闘配備につけ！
目標は

スペースコロニー

『サイド38』だ！」

「ぬお〜！また負けたく〜！」

「はっは、

ナイトもまだまだ未熟だな。

まだやるのか？」

「あつたりめえだ！

勝つまで

何度もやってやる！」

「…今日は朝帰りだな。」

そうして

またゲームを

やろうとしたその時、

「ん！？」

突然何かを感じた。

「どうした、ナイト？」

「何か…来る。」

「は？何言ってるんだよ。

こんな所に

何が来るってんだよ。」

「分かんない…、

分かんないけど…、

何か恐ろしいものが

来る気がする。」

「マジで？」

「うん。」

「と、とりあえず

外に出ようぜ。」

本当かどうか確かめなきゃ。」

アルバは

「占めた！」

という顔をしている。

「あれだ！！！」

大声で叫び、

『それ』を指差した。

その巨体は、
ここには
似つかわしくないほどの
異様な雰囲気を
醸し出している。

全身緑色の
超巨大人型ロボットで

手には
黒い銃らしきものを持っている。

それが十数機もいるのだ。
異様としか言いようがない。

「あ…あれは…、
モビルスーツ！？
どうしてこんな所に！？」

「あいつら…、
攻撃してくる。
俺達が狙いだ…。」

時々ナイトは
突然何かを
予知できるようになる、
超能力的な能力を持っている。

もちろんアルバも

それは知ってはいたが、
今回ばかりは、
信じきれずに
半信半疑だった。

「早く逃げよう、
安全な場所に。」

「よ、よし！こっちだ！」
2人は走り出した。

街からは
爆発音、悲鳴、銃撃音、
そんなもの
ばかりが聞こえてくる。

一体どうして、
何故コロニーを
攻撃してくる！？
何の目的があるんだ！？
一体奴らはなんなんだ！？

第3話：悲しみを越えて

2人は

シエルターへと続く

エレベーターの前で止まった。

「ここだ。」

だが、どこも

満員の文字が光っている

アルバは

シエルター内へ繋がる

通信機のスイッチを入れた。

「満員つていたい

どついう事ですか!？」

通信機の映像には

女性が映し出されている。

「どうもここもありません。

これ以上

詰めようが無いんです。」

「そんな…。」

どつすりゃいいんだよ。」

通信機の電源を切り

頭をガツクリと垂れた。

すると

頭越しに声が聞こえてきた。

「何言ってるんだよ、

アルバラしくない。」

「えっ？」

見上げると

ナイトが…、

笑っている。

「あのなあ…、

どうあがいても

この状況は

変えられやしないんだ。

だろ？

だったら

また別の方法を

考えるしかないじゃん。

アルバ、

ここは一つ冷静になれ。

冷静に考えるんだ。

それで思いつかない時は、

まっ、そんな時はそんな時だ。」

そうだ…。

ナイトの

言うとおりのじゃないか。俺とした事が……、
コイツの冷静さには
負けるよ。

「そうだな……」

「ありがとう、ナイト。」

「ああ。」

「ちょっと探してみるわ。」

何か…、何か無いか？

アルバは
頭の中の『記憶』を
かき集め始めた。

しかしほとんどが
今は

役に立たない物ばかり…、

これもダメだ、

あれもダメ、

それもダメか…。

だが、

遂に見つけた、
運命の『記憶』を。

「これだ!!」

「あつたのか!? 方法が。」

「ああ。」

走りながら説明する。
だからついてきて。」

2人はまた走り出した。

「俺が小さい頃の時だけど、

父に何かのカードを

貰ったんだ。

幼い俺には

よく分からない

代物だったけど。

そして

中学生になつて

部屋の物を整理したら

それが出てきたんだ。

最初は

なんだこりゃ? って

思つてさ、

よく見てみると

裏に

地図が書いてあるんだよ。

そしてその目的地が、
なにかの施設なんだ。

試しに一度

行ってみただけ

周りが鉄で作られてて

かなり頑丈そうだし

さすがに気まずいから

中にまでは

入らなかったけど…。」

「そうか、良かった。

これで助かるかも。」

「ああ、大丈夫だろ。

でも開くかな…?」

「開かなかったら…、

その時はその時だ。」

しばらく2人は

黙々と走った。

すると、小さいが

いかにも重厚そうな施設が

目の前に現れた。

傷一つ無い所を見ると

かなり頑丈そうだし。

「どうやって開けるんだ？」

「こいつだ！」

アルバは

カード入れから

横縞の緑・青・白の

三色が描かれたカードを出した。

「あとは扉か。」

「確か

ここの裏にあったはずだ。」

「急ごう。

でないと

奴らに見つかっちまう。」

全速力で走り、

一つ目の曲がり角を曲がった。

するといきなり

目の前の風景が遮られた。

「おわっ!?!？」

足元の黒いライン

そして上へと続く緑。

「こゝ、これは…。」

「モビルスーツ!?!」

「バレないうちに逃げる！！」

足と足の間をすり抜け、
再び走り出した。

その時

ナイトは、

チラリと

後ろを振り返った。

そこに見えたものは、

MSが

銃口をこちらに

向けている光景だった。

「アルバ！伏せろ！！」

「えっ？」

その時だった。

アルバの目の前が

真紅に染まったのは。

そして次の瞬間、

大地が碎ける音がした。

「うわ!!」

前にいたアルバは
後ろに吹っ飛ばされ、

ナイトは

なんとかその場に
踏みとどまった。

強靱な風が吹き抜け、
ナイトの体に打ちつける。

その時

すぐ脇をアルバが
過ぎ去っていった。

「ア…アルバ…。」

立つことでさえ
難しい状況の中では、
友をただ見送る事しか
できなかった。

やがて風が止んだ。

MSはどうやら

去っていったようだ。

「アルバは…？
どこ…だ？」

辺りを見回してみても
いないようだ。

やがて

ゆっくりと

おぼつかない足取りで

アルバが

飛ばされたであろう所を
探し始めた。

「アルバ！どこだ！？

アルバ！！」

必死に友の名を呼んだ
だが、返事は無い。

すると

瓦礫の上に

何か色のついた物が

落ちているのが見えた。

「あつ……あれは……、」

緑・青・白の三色で

彩られた長方形の物…、

アルバが小さい頃に
貰ったというカード…、

「どうしてこんな所に…、」

手にとってみると
裏側がネットリとしている。

ゆっくり手を離してみると…
紅い何かがついている。

血だ…。

「まさか…、

アルバは…もう…。」ナイトは
アルバの死を悟った。

この時生まれて初めて
『死』を知った。

「く…、アルバ…ごめん…。
俺の…せいだ…。」

俺がもつと

早く気付いていれば…、
俺がしっかりしてれば…、

こんなことには…。」

アルバ…ごめんな…。」
許されるはずなど無い。

そんな事は分かっていた。

でも謝ることしか

今のナイトには

出来なかった。

「俺だ…俺が悪いんだ…。」

みんな…俺のせいだ…。」

ズガァン!!!

「!?!?!?」

すぐ手前に

流れ弾が直撃した。

なんとか

そこに踏みとどまれたが

「ここは危険か…。」

アルバ…ごめん…
絶対また来るから
待っててくれよ…。」

そうしてナイトは、
そこをあとにした。

先ほどの
施設の扉の前に行き、
カードを差し込む。

ピピッと音がして
認証された証を示した。

ガシャン。
機械音が響いたと思うと
扉がゆっくと
左右に開き始めた。

急いで中へと入り、
中から
またカードを差し込む。

再度認証され、
今度は
ゆっくと扉が閉まった。

中は
電気が着いていないため
暗くて
よく分からなかったが、
結構広いようだ。

「誰かいますか？」
そっと尋ねてみる。

返事が無いところをみると
誰もいないようだ。

パッ！！

突然明るくなり
とっさに目を閉じた。

どつちら
自動で電気がつくようだ。

やがて
明るさに目が慣れ始め、
ゆっくりと目を開けた。

うつすらと
前にある『もの』が
見えてきた。

完全に目を開けた時、
驚愕した。

10メートル以上はある
巨大な人型ロボット、
腕、足は白色
コックピット上部、肩が若草色
コックピットの
主な部分が青色。
頭部は全体的に白
黄色いブーメラン
みたいなものがあり
その真ん中に赤く、
四角いものがついている

背中には
灰色のバツクパツクと
白い羽のようなものがある。

「これは…、
モビルスーツじゃないか。
どうしてこんな所に…？
いや、そんな事は
どうでもいい。」

これなら奴らを…、

撃退くらいは

できるかもしれない。」

無論ナイトは

操縦の仕方など

全く知らない。

しかし

何故かMSを見たとき

血が騒ぐのを感じた。

なぜだろうか…。

大丈夫だと思えた。

急いで

エレベーターへ乗り、

コックピット内へ入る。

どうやら最初から

電源はついていたようだ。

その後

何を押しせばいいのか、

どうすればいいのか、

何故か

手に取るように分かった。

「アルバのような人は

もうこれ以上

増やしたくない。

俺が…俺がやらなきゃ。」

ナイトは決意を固めた。

ガシャン

天井がゆっくりと
左右に開いた。

「ナイト・レン

行きます!!」

ナイトは空へ羽ばたいた。
戦火を止める為に、、

第3話：悲しみを越えて（後書き）

大した小説を書けてないなあって思っています、雅です。まだまだ
駆け出しなんでそこらへんは大目に見てやってください（汗）

いつも夜に小説を書いているんですが、この頃、野球部の朝練続きで
眠いつてのに早く寝るところか執筆しちゃってます（笑）

おかげで朝は眠いし、

授業中はよく寝るし…、

なんか愚痴ばつかな気が…（冷汗）

それはそうと次は四話目か…、

さてどうなるのでしょうか？

アルバは本当にしんだのか！？

ナイトは一体何者なのか？

…っというか

超スローペースですんません（謝）

第4話：優しさゆえの失態

兵士の1人が

右方向より近付いてくる

見たことの無い

MSに気付いた。

リーダーには

『unknown』と書かれている。

つまり

まだ知られていない機体…、

「新手か!？」

ナイトは、

スラスターを一気に加速させ

敵機に突っ込んだ。

「なに!？」

は、速い!」

素早く

ビームライフルを構え、

紅い弾を放った。

人々は逃げ惑い…、

「もう…やめろ…。」

ナイトは

それを体を旋回させ、
易々とかわした。

1人、また1人と
この世から消えていく…。

「もう…たくさんだ」

瞬時に

白いビームサーベルを抜き放った。

ただ平和を望み、

平穏に暮らしたい、

ただそれだけなのに！！

「これ以上…、

人を殺すなああ！！！！」

それをそのまま

敵機のコックピットに突き刺した。

「ひっ！うわああ！！」

「どうした！？

応答しろ！！」

ズガンー！！

派手な爆発音とともに

緑のMS、

『ZAKU』は大破した。

「な…、なんだと…！？」
隊長らしき者は驚愕した。

そんな馬鹿な…！？
抵抗勢力は
無いんじゃないかったのか！？
一体どういうことだ！？

「はあ…はあ…。」

「キサマ！

よくも…！」

近くで破壊活動を行っていたザクがこちらに向かってきた。

「くっ！」

すぐさま

ビームライフルを構え
白き弾を放った。

放たれた弾は、
寸分の狂いも無く
コックピットを貫いた。

「ぐわああ!!」

叫び声を残して、

また1人消えていった。

「お、おのれ——!!」

「待て!

勝手な行動をするな!」

「隊長!?

ですが……!」

「お前が

勝てる相手ではない!」

あやつ……、

あれほどの

的確な射撃が出来るとは……、

ただ者ではない。

私ですら

到底及ばないだろう。

何者なんだ……? 奴は。

「中尉、

目標の確保は成功したか？」
隊長は別の兵士に呼びかけた。

「はい、

片方は確保致しました。

ですが、もう片方が…。」

声が返ってきた。

…どうやら女のようにだ。

「分かった、

引き続き搜索してくれ。」

「了解。」

「さて…、」

先ほどの者に向かって言った。

「これから奴と接触する。」

お前は手出しするなよ。」

「えっ！？しかし！」

「これは命令だ！」

「…はい、了解しました。」

隊長は、

搭載されている疑似太陽炉、
GNドライブを加速させ
ナイトがいる方向へ向かった。

「ん…、

なんだ…？」

通常とは違う、
赤いザクがゆっくりと
こちらに向かってきている。

「隊長機か…？」

念のため

ビームライフルを
照準に合わせた。

「銃を下ろせ、

モビルスーツのパイロット！
攻撃の意志は無い。」

だがそれを無視し、
ライフルを下ろさず、
依然と構え続けた。

「こちらの言うことは

信用出来ないというのか…、

まあいい、

好きにしる。」

「今すぐここを立ち去れ。」

「なに!？」

モ、モビルスーツの

パイロットは…少年だと!？

「さもなければ…、

貴様を討つ！」

「分かった…良いだろう。

だがその前に1つ聞こう、

貴様の名は？」

「ナイト…ナイト・レンだ！」

「ナイト…レン…だと!？」

「そうだ!

それがどうした!？」

「いや…、そうか。

私はアスラ・ラビスタ大尉だ。」

「アスラ・ラビスタ…。

覚えておこう。」

「中尉、

搜索活動を中止せよ、

これよりコロニーを脱出する。」

「いいんですか？」

「もう探す必要はない。」

「了解。」

「小僧、ナイトとかいったな、
もう二度と

会わない事を願おう。」

「…？」

アスタはそのまま
そこを去っていった。

ナイトはただ呆然と、
アスタ達を見送っていた。

「アイツらは…、

俺は…、

一体何者なんだ…？」

その後…、

ナイトは

MSのパイロットとして
街の英雄となった。

その噂は

謎の軍団による
コロニー攻撃と共に
全世界に放送された。

そして

サイド38は、
復興活動を行い始めた。
住民全員が協力し、
放置された死体を
埋葬してやり、
怪我人には治療が施された。

そして

1ヶ月の時間が流れた。
。 。
ニユースでは、
例の軍が
名を名乗ってきたという…、
『マーシリス』
それが奴らの組織名だそうだ。

1ヶ月もの間、
マーシリスは様々な場所へ
攻撃を仕掛けた。

しかし

その意図は全く見えず、
ただの
虐殺的行為にしか
思えなかった。

一応軍隊は出動するが、
どこの軍も長年戦闘を
行っていなかったせい
か、常にマーシリスの
圧倒的勝利だった。

やがて、

マーシリスに対抗すべく、

『Earth Federation Army
to face Mercilliss』

通称

E・F・A・M（エファーム）
が発足した。

エファームは

戦争根絶を理念とし、

マーシリス並びに

テロリスト撲滅を誓い、

全世界及び全コロニーに

公表した。

プツッ！

ニュースを見ていた

ナイトはテレビを切った。

「エファームか…、

まあ俺には

全く関係ないだろうな…。」

よし…、
それじゃ、行くか…。

ナイトは
サングラスをかけ、
部屋を出て行った。

そして
玄関の扉のロックを外し、
自動扉を開けた。

すると、
ナイトの目の前に
見知らぬ男が立っていた。

「!?!」
ナイトは
すかさず銃を構えた。

「ナイト・レン君だね?」

「だとしたら?」

「私の名は
エフォート・エグザクト
新たに発足した
エファームの

パイロットだ。」

金髪の男性は
そう名乗った。

目は黒、

黒い特殊な

スーツを着ている。

「そしてこっちは

アミュー・ブルータス

同じくエファームの

パイロットだ。」

「よろしく。」

赤い髪に

水色の瞳を持つ少女、

服装は、

普通の民間人と全く同じ、

茶色のジャケットに

白いワンピース、

青いジーンズ

といった出で立ちだ。

全く異色のコンビに

ナイトは

困惑を隠せなかった。

「君に話があるんだ。

ちよつといいかな？」エグザクトと

名乗る男性が

切り出した。

とりあえず

ナイトは銃を下ろした。

「話？」

「そつだ。」

ナイトは

扉のロックをかけながら
言葉を返した。

「悪いけどこれから

用事があるんだ。

後にしてくれないか？」

そのまま

その場を離れようとした。

…と、

「ちよつと待ちなさいよ！」

いきなり肩を掴まれた。

アミューと

名乗る少女のようだ。

「随分と手荒なんだな。」

「うるさいわね！

ちよつとぐらい

話を聞いてくれたって

良いじゃない！」

「本当に
用事があるんだ。
後にしてくれ。」

「そんな用事なんか
どうでもいいわよ！
いいから来なさい！」

そう言うや否や
ナイトの腕を掴み
強引に

連れて行こうとした。

だが、ナイトは

その手を振りほどいた

「そんな用事…？」

どうでもいい…

だと？」

「なによ…」

どうでも

いい事でしょ？

これから

話す事に比べたら

「てめえ…、
どんな話が
知らねえが、
これからの用事を
どうでもいいだと？」

ふざけるな!!

分かったような

口ききやがって!!

ナイトは

アミューを睨みつけた。

「おい、やめろ!!」エグザクトが止めに入った。

「なによ!!

こつちこそ

その用事が何かなんて

知ったこつちや無いわ!

でもね、

世界を救う以上に

大切な事が

あるっていうの!?!」

アミューは半泣きの状態で

そう言い放った

「世界を…救う?」

「そうだ。」

エグザクトが

アミューの代わりに

答えた。

「どつという事だ?」

「単刀直入に言うと

エフアームの

パイロットに

なってもらいたい。」

「エファームの…

パイロット…!？」

あまりの出来事に

驚きを隠せなかった。

エファームの

パイロット!？」

なんかの間違いだろ!？」

「そつだ。

君の

マーシリス撃退の噂は

聞いている。

一発も被弾せずに

二機も

倒したそうじゃないか。

そつでだ。

君に是非ともなってもらいたい。」

「ちよつと待てつて!

俺はただの民間人で

普通の高校生だぞ!？」

俺は撃退したけど、

あれは単なる偶然で、

突発的に出来た事

なんだぞ!？」

「果たしてそうかな?」

「なに！？」

「断言しよう。」

MSは偶然で
動かせるもの
などではない。」

「えっ！？」

「君はMSを
操縦出来る
素質があつた。
だからこそ
あのように
動かせたのだ。」

「仮に…」

「ん？」

「仮に…それが
真実だとしてもだ、
俺はエファームには
入らない。
いや、軍人になんか
ならない。」

「なに！？」

「エフアームだろうと
マーシリスだろうと、
要は軍隊なんだから？
戦争をするんだろ？」

「そうだ。」

戦争を無くす為に
戦争をする。
矛盾した話だが、
仕方ない事だ。」

「仕方ない…だと？
戦争で人が死ぬ
つていうのに…、
それを仕方無いで
済みますのか！？」

「！？」

「どんな人にだって、
家族がいるんだ！
その人が死んだら
家族が悲しむんだ！
俺はもう…、
人殺しにだけは、
なりたくないんだ…。」

「…。」

それきり
アミューもエグザクトも
黙り込んでしまった。

「もう…良いだろ…。」

ナイトは

バイクにまたがると

2人を残しそこを去った。

ナイトは

車道を走っている。

途中、花屋に寄り

イチジクの花束を買った。

しばらく進んでいくと、

ナイトはバイクを止め、

そこへ入っていった。

ここは

『ネタブリス霊園』

つまり墓地だ。

そして、ナイトは

1つの墓の前で

立ち止まった。

墓石には

『Alba・Karn』

と書かれている。

そう、

ここはアルバの墓だ。

ナイトは、

買って来た

無花果の花束を

そこに置くと、

「なあ…アルバ…、

俺…、

どうしたらいいのかな？

世界中の人々を

救えるのは

勿論分かってる。

けど…そのために

人を殺さなきゃ

いけないんだ…。

どうしたら

いいのかな…？」

と語りかけた。

「ここ…誰のお墓？」

頭越しから

アミューの声が聞こえる

「！？」

驚きのあまり、

即座に後ろを振り返った

「キミの後、

尾けて来ちゃった。」

「…ふん。」

「なんで

死んじゃったの？

病気？」

「マーシリスのMSに

撃たれた…。」

「う、ごめん。」

「別に謝る必要は無いさ

どうでもいい事

なんだろう？」

「あ、あれは…その…、

事情を…知らなくて…

ごめん…。」

「ふ…。」

さっきから

謝ってばかりだな。」

「う、うるさいな。」

— 心配い事言ったのは

私の方なんだし、
謝つとくのが
筋つてもんでしょ？」

「そう…かもな。」

「ねえ…。」

「なんだ？」

「まだ何かあるのか？」

「もう一回…」

「考え直してくれないかな？」

「その…エファームの」

「MSのパイロットになること。」

「もう言っただろう。」

「俺はならない。」

「確かに戦争をすれば」

「人殺しになれるけど、」

「武装解除するだけなら？」

「え？」

「つまり」

「コックピットを狙わないで」

「腕とか頭ばかり狙って、」

「武装解除すれば、」

「敵は殺さないし、」

「味方も敵に殺されないし、」

「どう？」

「確かにそれは理論上、
理にかなってはいいる。」

「でしょ！」

「だが…、
俺にそんな実力も無ければ
経験も無い。」

「でもキミ、
ザクのコックピットに
完璧に当てたじゃない。」

「言っただろう、
あれは偶然だと。
夢中になって
自分でも何をしているのか
分からなくなっていたんだ。」

「出来るわよ、あなたなら。」

「…どうだかな。」

「最後にもう一度だけ、
いい？」

「え？」

「エフアームの
パイロットにならない？」

「…考えておくよ。」

「良かった、ありがとう。」

「…ふん。」

「どうだった？」

エグザクトはアミューに聞いた。

「成功半分、
失敗半分ってところかな？」

「なんだそりゃ。」

「考えておくって。」

「まあさっきに比べれば
上々ってところか。
よし、帰るぞ。」

「了解。」

アミューが敬礼をすると
2人はスポーツカーに乗り、

まもなくそこを去っていった。

あとに残されたナイトは、
足下に何かがあるのに気付いた。

「なんだ…こりゃ。

ハンカチ…？」

一枚の

ピンク色のかわいいハンカチが
そこにあった。

「まさか…、

あのアミューって子の…。

…この時間帯だと

シャトルに

乗り始めたぐらいか、

シャトルは10時発だから

まだ間に合う！」

急いで墓地を出て、

バイクにまたがると

エンジンフルスロットルで

発進した。

何やってんだろ…俺。

シャトルの中で
アミューとエグザクトの2人は
イスに座りくつろいでいる。

「あつ！」

突然アミューが声を上げた。

「ん？どうした？」

「ハンカチ…、」

「え？」

「ハンカチ落としちゃった…。」

「ハンカチ？」

別に良いだろ。

諦める。」

「ちょっと探してきます！」

「お、おい！」

もうすぐ出発だぞ！」

「すぐ戻ります！」

そう言うのが早いや、

アミューは
シャトルの外へ飛び出した。

「…はあ。」
後に残されたエグザクトは
溜め息をつく以外に
仕様がなかった。

宇宙港に一台のバイクが
猛スピードで来て、
バイクを
いきなり横に倒して、
急ブレーキをかけた。

「ふう…、
ようやく着いた。」
急いでバイクから降りると、
全速力で走り、
港内に駆け込む。

「すみません！
地球行きで今から
一番早い宇宙船は
何番ホームですか！？」
息を切らしながら
受付の人に尋ねた。

「ご、五番ホームです。」
あまりに急な来訪に
かなりビツクリしながらも
受付嬢の人は言葉を返した。

「ありがとうございます！」

「ですがもう、

出発致しますので…

…てあれ？お客様？」

すでにナイトは

五番ホームの方へ

走って行ってしまった。

ナイトは

人混みの向こうに

赤い髪の少女が

走っているのを見つけた。

「アミューさん！」

彼女の名を大声で呼んだ。

すると

アミューはこちらに気付き、

駆け寄ってきた。

「あれ？ナイス君だっけ？

…ごめんね、今急いでるから。」

「これの事？」

「あ、これ！
良かったあ〜。
どこに落ちてたの？」

「墓地にありましたよ。
それより早く！
シャツルが
行ってしまいますよー！」

「え？あ、うん。
…ありがとう。」

すると…、
《五番ホーム発の
地球行きの宇宙船は
定刻通りに出発致しました。》
とアナウンスが流れた。

「えっ！？」
2人の声が同時に響いた。

「行っちゃった…。」

「ごめん…。」
「キミのせいじゃないよ。
ハンカチぐらいで
大騒ぎした私が馬鹿だったんだ。」

「…そうだ！
ついて来て！」

「え、何！？」

「いいから早く！」

「ちょ、ちよっとく！」
ナイトはアミューの腕を
強引に引っ張って行き、
バイクの後ろに乗せた。

「私をどうしようっていうの！？」

「いいから黙って！
これ被って。」

予備のヘルメットを
アミューに渡すと
ナイトはヘルメットを被らずに、
エンジンをかけた。

「しっかり捕まれ。」
バイクを一気に加速し
猛スピードで宇宙港を離れた。

「これからどこに行くの！？」

「格納庫だよ！」
「か、格納庫！？」

MSを出す気!?!」

「それしか手は無いだろう!?!」

「でも…、」

MSをこんな事に使うなんて聞いた事が無いわ!」

「じゃあ俺が最初の人だ!

ほら、着いたぞ!」

前も見たMSの格納庫、ナイトがこれを見るのは実に1ヶ月振りとなる。

素早くカードキーを取り出し、読み込ませた。
すると

ゆっくりと扉が開いた。

そこには、一機のMSがたたずんでいる。

「す…すごい…。」

「いいから早く乗って! 時間が無いんだろう!?!」

「う、うん!」

2人は

急いでエレベーターに乗り、コックピットの中に入り込んだ。

コックピットを閉め
MSの電源を入れた。

G i g a n t i c
U n i l a t e r e l
N u m e r o u s
D o m u n a t i n g
A M m u n i t i o n

の5つの文字が出た後、
前方と左右に
モニターが映し出された。

「行きます！」
一気に

スラスタを加速させ、
格納庫を出た。

そして

コロニーの出入り口に近寄り
MSの指を近付けた。
すると、

赤外線が送られ、
全ての扉のロックを
解除し、扉を開けた。

そこを一気に抜け、
宇宙へと羽ばたいた。

「…すげえ。」

ナイトは今まで
宇宙という物を

生で見たことが無かった。

そのため

宇宙の漆黒さ、広さを

初めて感じた事となった。

「なに見取れてんのよ！

早く行かなきゃ！」

「あ、ああ。」

先程の感動に

十分に浸ることが出来ぬまま、

なんとも

煮え切らない気持ちではあるが、

仕方なく

スラスターを再度加速させた。

「一つ気になったんだけど、

このMSってどこ製？」

「さあ。」

「さあって、

知らないの!？」

「これは友達に

託されたものだからな。」

「そうなんだ…。」

それきり2人は黙り込んだ。

ナイトは相変わらず、
MSの操縦をしている。

ビービー！

突然周波数の高い音が鳴った。
敵MSが接近しているのだ。

「!？」

その場の空気が凍りついた。

モニターに

グフと呼ばれる

ザクによく似た

青いMSが3機前方から

近付いてきている。

「敵は、3機か…。」

「なんとか突破出来るな。」

ナイトは

一気にスラスターを加速させ、

3機の敵に突っ込んだ。

「な、なんだあれは!？」

「新手か!？」

ザクのパイロットの1人は
驚きの声をあげた。

「どちらにせよ敵だ。

排除しちやおうぜ。」

2人目のパイロットが言った。

「そうと決まれば攻撃だ！」

3人目のパイロットは

他の2人に言った。

「おう！」

「ちっ

来やがった。」

念の為ビームライフルを構え
臨戦態勢を取る。

「死ねえ！

ガンダムのパイロット！」

3機から同時に

ビームマシンガンが

グフの指から放たれた。

「くっ！」マシンガンとはいえ

一発一発が

通常のリムライフルと

ほぼ同じ速度

同じ破壊力を持っている。

そのため

避けるのは困難を極めた。

「おらおら！」
3機によって、
ビームの雨が降り注ぐ。

ナイトは
基本的に機体を旋回させ
時折
盾で防いだり、
ビームサーベルで弾いたりと
何とか当たらずに済んでいた。

この人…、
ただ者じゃないわ。

アミューは
直感的にそう感じた。

「クソつたれえ！！」
ナイトは声をあげた！
それと同時に
ビームライフルを撃とうとした。

…と、
人殺しにだけは
なりたくないんだ！
自分の言った言葉が
脳裏によぎった。

「くっ！」

ビームを撃つのを止め、
再び体を旋回させ
回避を続けた。

「このお〜！」

ウロチヨロと〜！」

1人が

ビームソードを取り出すと
残りの2機も取り出し、
一斉に突撃してきた。

武装解除すれば？

アミューの声が
頭に突き刺さる。

「くそ〜！！！」

スラスターを

一気に最大加速させ、

3機の中へ突っ込んでいった。

「なに！？」

「は、速い！！！」

ナイトは

左手にビームライフルを持ち、
右手にビームサーベルを装備し、
攻撃を仕掛けた。

まず
先陣をきつた真ん中のグフの
マシンガンのある右腕と
頭を瞬時に切り裂き、
その機体を蹴りつけた。
次に右にいたグフの
左足にビームを放ち、貫いた。
左足は爆破したが、
まだ動ける状態ではあるようだ。

「くっ！」
左にいたグフが
右手の
ビームマシンガンを
撃ちだしてきた。

「うおー！ー！！」
ナイトはそこに
ビームサーベルを
槍投げのように投げ、
右腕を爆破させた。

「ぐっ！！」
…くそ、撤退する。
敵は強い！
勝ち目は無い！」

3機のグフは、
クルリと体の向きを変えると、どこか宇宙の彼方へ
飛んでいった。

「はあ…はあ…。」

「ナイトさん、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。
地球に向かおう。」

「は、はい。」

この人…、何者なの？
まるで人間の動きでは無いわ。
反応速度といい、
反応が早いわりに
かなり正確だし…、
本当に同じ人間なの？

ナイトは黙って
MSを操縦している。

あのニュース…、
やっぱり

この人がパイロットなんだ。

「ねえ、」

「ん？」

「オートパイロットシステム

「って知ってる？」

「え？何だそれは？」

「知らないの！？」

パイロットがいなくても

MSが勝手に動いてくれる

システムの事よ。」

「…知らない。」

「はあ…、

あれだけ操縦出来るのに

基礎的な事は知らないんだね。」

するとアミューは

様々なボタンを入力し始めた。

「はい終わり。」

これでOKだよ。」

「どうも。」

まったく…、

凄いんだか凄くないんだか…。

半分呆れた表情で

ナイトの頭を見つめていた。

ナイトは安心したのか

すぐに眠り始めた。

「ここは…？」

白塗りの壁に白いタイル、
どこかの施設のようだが、
ナイトには覚えがない。

手を見てみると

左手がかなり小さかった。

なんとナイトは

年端のいかない子供だった。

そして右手に目を移すと…、

そこには

血にまみれたナイフと

飛び散った血が右手や

体の至る所に着いていた。

そして…、

目の前に……、

子供の死体が転がっている。

ナイトが

腹部を刺したかのように。

「うわぁー！ー！ー！」

あまりの出来事に
ナイトは悲鳴をあげた。

気がつく

ナイトは

コックピットに戻っていた。

「夢…か。」

冷や汗で

背中がぐっしょりと

濡れている

「大丈夫？

かなりうなされてたけど…。」

頭上から

アミューの声が聞こえた。

「あ、ああ。

大丈夫だ。」

「だと良いけど…。」

「一体俺はどこにいたんだ？
記憶に無いぞ、あんな所。」

「うわあ〜。

「いつ見てもキレイね。」

「えっ？」

「あれよ！」

「ほら！目の前！」

「目の前…？」

「あつ！」

「青い球型の惑星、

地球だ…。

「ナイトは

ガンダムを操作し

盾を構え、

大気圏突入態勢を整えた。

カチッ

「ナイトは

機体の冷却ボタンを

いつの間にか押していた。

「よく分かってるわね。」

「アミューは感心している。

「え？なにがだ？」

「いや…だから…」

「機体の冷却ボタンとか…、」

「そんな事したか？」

「ええ、覚えてないの？」

「ああ、まったく。」

無意識にやってたのかしら？
もしかしたら

体が覚えているのかもしれない。

だとしたらこの人
やっぱりただ者じゃない。

ゴゴゴゴゴゴ……、

大気圏に突入し
機体が大きく揺れ始めた。

「う…お…。」

「もう少しで地球ですよ。」

「こんなに揺れるとは思わなかったよ。」

しほらく

ガンダムは降下し続けた。

そして…、

「ここが…地球…。」

「えっと…、

エファームはあっちね。」

アミューは

右斜めの方向に指差した。

「りょうかい。」

ナイトはスラスターを

一気に加速させた。

「そうだ、

そろそろ大尉、

地球に着いたかな？」

アミューは

通信機のスイッチを入れた。

「大尉、応答願います。」
すると

コロニーで会った

エグザクト大尉が

どこかの部屋にいる。

「小尉か、
何をやっていた!?
今どこだ!?」

「地球…です。」

「はあ!?
地球!?

「冗談もいい加減にしろ!」

「いえ、本気です。
先程ナイトさんの
MSで

「大気圏に突入し、たった今突破しました。」

「なんだと!?
それは本当か!？」

「はい、嘘偽りはありません。」

「…分かった、
本部には私から伝えておく。
極力人目を避け
雲の上を移動するんだ。」

「了解。」
「それだけ言っと
アミューは
通信機の電源を切った。」

「雲の上か…。」
そばで聞いていたナイトは
機体の向きを変え、
雲へ突っ込んでいった。

ほんの数秒のうちに
ナイト達は雲の上にあった。
一旦機体の動きを
空中で停止させている。

「えっと…、どっちだ？」

「あつちよ。」

アミューは
前方向に指差した。

ナイトは言われた通り、
前方にスラスターを加速させた。

エグザクト大尉は、
自分の個室でイライラしていた。
「まったく…
何をやってるんだ
アミューのやつ…。」

エグザクトは通信機の
スイッチを入れた。

「本部、本部、

聞こえるか。

私だ、エグザクト大尉だ。」

「大尉、どうされましたか？」

空中に映し出されたモニターから
1人の女性が応答した。

「アミュー小尉の事だが、
どうやら

モバイルスーツに乗って

現在地球に

到達したらしい。」

「ええ！？

モバイルスーツに！？」

「どうもそうらしい。

それらしき機体が

来るはずだ。

よろしく頼むぞ。」

「り、了解。」

それを聞くと

エグザクトは

通信機の電源を切った。

「はあ…。」

地球でも1つ

ため息をこぼした。

「見えた、あれよ。
降下お願い。」

「りょうかい。」

ナイトは
スラスターの速度を緩め
向きを地上へと変えると
再度スラスターを加速させた。

やがて
眼下に軍事施設が
広がっているのが見えてきた。

「なんだありや。
すげえな…。」

「あれがエファームの
軍事施設よ。」

「へええ。」
数々のMSや戦艦、
司令塔など
何もかもが想像と
ケタ外れだった。

やがて

ナイト達2人は、
舗装された地面に降り立った。
目の前には
大尉が立っている。

ナイトとアミューは
コックピットから出て、
足掛けがついた
ワイヤーを使い、
降りてきた。

「大尉、
ただいま戻りました。」
アミューは
エグザクト大尉に敬礼をした。

すると
エグザクト大尉が
アミューに近寄り
その横つつらをはたいた。

「!?!」

「馬鹿やろう!
シャトルに
乗り遅れたばかりか
モビルスーツに乗って
帰ってくるとは

どういふことだ！！

こんなことは

前代未聞だぞ！！」

「す、すいません。」

「処分は本部の方で決める。
それまでお前は謹慎だ！」

「…はい。」

「小僧、

ナイトとか言ったな。

覚悟は

出来ているんだろうな？」

「覚悟？

よく分からないけど

とりあえず

帰って良いですか？」

「まだ分かって

いないようだな…。」

「え？」

「キミをここから

帰すわけにはいかない。」

「ええ！？」

「モビルスーツや戦艦は
上空から見えただろう？」

「ま、まあ。」

「それらは皆

軍事機密の事なんだ。

どついう事が

大体分かったかな？」

「イマイチ…、」

「つまり

軍事機密の情報を

外部に持ち出されたら

こちらとしても

非常に困るんだ。

それにキミは

エファームの

戦力になるしね。」

「え」と…

つまり俺はここから

一歩も出られないと

「そつだ。」

「どついう事は自動的に

モビルスーツの

パイロットとして

配属されるようになると」

「そういうことだ。」

「やっちまった…。」

ナイトはこの時
ようやく自分がした事の
重大さを理解した。

「エファームによっこそ。
ガンダムのパイロット、
ナイト・レン君。」

「…はめられた。」

ナイトはアミューを恨んだ。

チクシヨウ…あいつめ…
やりやがったな…。

「おい、コイツを
本部へ連れていけ！
新たなパイロットだ！」

「はっ！」

2人の若い兵士が
ナイトの両肩を
持ち上げると

そのまま
引きずって連れて行った。
かくして

ナイトはエファームの

パイロットになったのだった。

第4話：優しさゆえの失態（後書き）

第4話目を呼んでいただき本当にありがとうございます。感謝感激
雨アラレってところです。…ていうか絶対気付いてるかとは思いますが、今回かなり長いです、はい。とりあえず撃退する所まで書いてはいいんですが、さすがに短いからもうちょっと書くか…と調子乗ってたらいつの間にか一万文字を超え…。ヤバいと思った時にはもうすでに遅し、結局そのままやっちゃえ…って感じで書き上げました。最後の方のナイトのセリフで「やっちゃまった…。」ってありますが、それをクールポコのネタ風に「やっちゃまったなあ！」ってしてみようかな…って思ったりして（笑）

さて、

なんかナイトが強引に配属されちゃいましたが…、これからどうやっていきましょうか…。まあその場その場で頑張りますかね。では、また次の話へ

第5話：策（前書き）

ずっと5話を投稿出来ず、申し訳有りませんでした。それでも読んで下さる方がいるとしたら、よろしくお願いします。

第5話：策

大きな部屋に3人、
何やら話あっている。

「キミがナイト・レンが
サイド38での
活躍は聞いておるぞ。

正直こんな
年端の行かない
子供だとは

思わなかったがね。」

頭にややハゲがあり
紫色の背広姿の
小太りの男は、
ナイトに向かって
話している。

彼はエファームの議長、
つまりエファームの中で
一番偉い人にあたる。

「は、はあ…。」
ナイトは私服姿のまま
話を聞かされていた。

「キミがここに
仕官しにくることは
実は

予想の範囲内だったよ。
あんな上手く
モビルスーツを
操れる男が
来ないはずはないと
私は信じていたからね。」

「…え？」

「そうだ、
その服では
エファームの
パイロットとして
格好がつかんだろう、
これを着なさい。」
「そういと
青い軍服と
伍長を印すバッチが
手渡された。」

「えっ？
伍長？」

「キミの活躍からすれば
これは当然の事だ。
受け取り方によっては
鼻屑目とも取れるがね。」

「ありがとう…」

「ごぞいます…。」

「キミも何かと

分からない事が多いだろう？

教育係を

あとでつかせよう。

では、

キミの活躍を

期待しているよ」

「は、はい。」

「なんなんだあの人は、

勝手に思い込んでいて

キミの活躍を

期待するだと？

はあ…。

早く帰りたい…。

「

新品の軍服を前に

個室の中でナイトは

1人ため息をついた。

コンコン、

誰かが外から
ドアをノックしている。

「どうぞ。」

やや不機嫌そうな声で
ノックに答えた。

ドアが開くと

そこに

アミューが立っていた。

「何か用？」

「それが

上官に対して聞く口？」

「くっ…。」

「まあいつか、

はいこれ。」

ズン！

紙の塊が

机に地響きを響かせた。

「今日から私が教育係よ。
よろしくね。」

アミューはナイトに
軽くウインクした。

「うゝえ!？」

「とりあえずこれ軍令ね。

あとモバイルスーツの

操縦マニュアルと

キミのMSの検査結果。」

ただでさえ高い紙の山が
さらに高くなっていく。

「あと…、」

「ち、ちよつと待て!

いきなり入ってきて

教育係!？」

訳が分からん!」

「だから

私はアナタの

教育係に任命されたから

これから

行動を

共にする事になるわけ、

お分かり?」

「…はあ。」

「なら結構、
とりあえずこれみんな
覚えきること。」

「はあ!？」

「ムチャクチャだろ!！」

「私は1ヶ月あれば
覚えられたけどね。」

ホントは2ヶ月だけど
アミューは

心の中で密かに思っていた。

「…期限は？」

「そうね、

2ヶ月くらいかな？」

「一週間だ!！」

「え?」

「一週間以内に
全部覚えきってやる。」

「なに言ってるんの、
無理に決まってるでしょ、

軍令だけで
軽く2000条は超えてるのよ。
さらにマニュアルは
3000項以上で
検査結果なんて
訳分かんないくらい
あるのよ。」

「やってやるわ。」

「ふん、

まあキミが

それでいいならいいか。

あ、そうそう

これからは私に対しては
もちろんのように敬語ね。

それで私を呼ぶときは

アミュー小尉と呼ぶように。

そういって、

それじゃね。」

そういって

アミューは部屋から
出て行った。

「…はあ。」

一週間かあ…、
キツいな…。

「はあ…。」

ナイトは
再度ため息をついた。

くく2日後くく

レストランで、
ナイトは、
体の周囲にかなりの
マイナスオーラを
纏いながら
コーヒーを
すすっている。

突然、
ポンツ！と
肩を叩かれた。

「ようっ！」
橙色のショートヘアに
赤い眼を持つ
白衣の青年がナイトに
親しみを持った目を
向けている。

「…エド？」

「久しぶりじゃないか。
どうだい？調子は」彼の名は

エドワード・パーディ
ナイトの同級生だが
二年程留年しているので
年は17才だ

「顔面蒼白なぐらいさ」

「風邪か？」

「いや、
軽いノイローゼさ」

「ハハハ！」

「エドはここで何を？」

「え？ああ、
モビルスーツの
研究開発を
しているのさ。」

趣味が
機械いじりなぐらい
だからね」

「そういえば
そうだったな」

「ナイトは？」
「モビルスーツの
パイロットだよ」

「へっ、

スゴいじゃないか。

知ってるかい？

エファームの

モビルスーツの

パイロットになるには

実技試験で

Bランク出した奴でも

不合格だったんだよ」

「Bランク？

それって凄いのか？」

「あ、当たり前だよ！

もしかして

知らなかったのか？」

「…まあな」

「どうやって

エファームに

入ったのさ。

もしかしてコレ？」

エドワードは

指で作るOKサインを

逆さにした。

つまりはワイロで

入ってきたのか？

という事を言っている。

「まさか！

スカウトされた
だけだよ」

「あ…そう、
…て、ええ！？
スカウトだって！？」

「ああ、それが
どうかしたか？」

「どうしたも
こうしたも無いよ！
スカウトって言ったら
実技試験で
SSランクと
認められたのと
全く同じ事だよ！
そんな話は
前代未聞だよ！」

「へへそうなのか」
「そうなのか…って
それだけ？
もうちょっと
喜んだら？」

「まあ…
喜ぶべき事だけ…
イマイチ実感湧かない

「っていつか…」

「やっと見つけた!!」
2人の会話を遮るように
誰かが声を出した。

「あ、」

ナイトが声を出した。

「こ、これは

ブルータス大尉!?
どうして

このような者に?」

「え?誰、あなた?」

「ハッ!

エドワード・パーディ
と申します!

自分は

モビルスーツの
技術者に

着任しております」

「ふん、そう。
でも

用があるのはコイツ、
アナタは
どっか行って」

「え？あ、ハッ！」
エドワードは
チラチラと
ナイト達の事を
見ながらその場を
半ば強引に
立ち去らされた。

「さて、
じゃ、はいコレ」
アミューは
一枚の紙を
ナイトに手渡した。

「なにこれ？
希望コードネーム？」

「そ、
ウチの上層部は
頭がお固いから
へんちくりんな
コードネームを
付けられても
嫌でしょ？
だからこうして
パイロットの自由に
コードネームを
決められるように
なってるってわけ」

「時代は
変わるもんだな……」

「まあね。」

昔では上層部が
勝手に決めてたから
面白い名前の人も
時々見かけるけど。
もっと前だと
実名のまま
だったらしいし、
信じられないわ。」

「ふん」

アミューの話を
軽く聞き流しながら
紙に

スラスラと書き綴った。

アルビス

・エラディケート

それが

彼のコードネームだ。

「これでいいのね？」

「ああ」

ナイト改めアルビスは

何かを
決心したかのように
うなずいた。

「あ、そうそう
下の空欄に
自分の特徴も
書いてね」

「特徴？」

「眼の色とか、
髪の色、
あとは
体型とかかな？」

それを聞くと
アルビスは

「眼は水色に
髪は焦げ茶色。

ちなみに
身長は163cm
体重は50kg
座高は70cm
だったかな？」

と、呟きながら
書き連ねていった。

「じゃこれは
提出するとして、

どう？

お勉強の方は。」

「え？ああ、

軍令なら完全制覇だ」

アルビスは

親指を

ぐつと突き立てた。

「え！？」

もう！？

えつと…じゃあ、

第1543条は？」

信じられない

と言った表情で

アミューはアルビスに

問題を出してみた。

「第1543条？

ああ、

コードネーム等は

原則的に

本人の希望に

よるものとする。

だが、

この時

本人の特徴なども

同時に記録し

提出すること。

だろ？」

「えっと…、」

あ、当たってる…。」

分厚い軍令書の

1ページを開きながら

アミューは

そう返答した。

「さすが、」

言うだけのことは

あるわね…。」

まああと4日で

覚えきれるかしら、

楽しみにしてるね。」

アミューは

半分嫌みがこもった

言葉を放った。

「んじゃ、」

これから

勉強するから」

そう言うなり

アルビスは

席を立った。

「え？あ、そう

頑張つてね

新人クン。」

「ふん…。」

「あ、そうだ

17時になつたら

エントランスホールに

来なさいよ！

確か

南だつたかな？」

「分かつた」

マーシリスの空母

『バイタル』内

機体を確認できる

窓の着いた部屋、

『レストルーム』で

アスタ・ラビスタは

考えに耽っていた。

3日前の襲撃…、

あのグフを

ああまでにやれる者が

エファームに

いたとはな…。

下級兵士とは言え

手強い事に

変わりはないはずだ。

それに

報告によれば、

見たことのない
アンノーン機だった
らしい…。
まさかあの少年か？

ふ…考え過ぎか。

ピピッ

腕に巻いてある通信機が
音を鳴らした。

「私だ」
通信機の
スイッチを押し、
それに答える。

「アスラ・ラビスタ少佐
至急、
ブリーフィングルーム
にお越しく下さい
これより
今回の作戦内容を
説明致します。」

「了解した」

エファーム総司令部
南エントランスホール

「南、南」と、

「これか？」

時刻は16:45、
予定までまだ15分ある。

「ちよつと

早く来すぎたか……」

時折、作業員やら
事務員やらが

出入りするぐらいで
人気は少ない。

そろそろ17:00に
なるうかという頃

北エントランスホールに
沢山の人が集まっていた

その中にはアミューヤ
エグザクト大尉の
姿もあった。

「おっそいな、
何やってんだろ？」

「連絡は取れるのか？」

「それが…、

さつきから何度も

通信しようとして

していますが…、

繋がらない

みたいです」

「全く…、

一体何をやってるんだ

アイツは…」

ハア…、

とため息をついた

時刻は17:15

「…遅すぎる」

しかめ面で

柱にも

たれかかっているのは

アルビス。

すでに予定時刻より

15分過ぎていた。

帰ろっかな…、

そう思い始めた時、

トン、

と肩を一叩きされた。

「キミ、もしかして
モビルスーツの
パイロット？」

唐突に聞いてきた
その女性は、
ブロンドの髪に
黒い眼、
そして見た目から
元気そうな
印象を受ける。

「そうだが…
それがどうした？」

「だって、
パイロットスーツを
着た1人の男が
集会にも行かず、
ただ
突っ立てるんだけ
なんだもん。
声をかけずに
いられないよ。」

「集会？」

「知らないの？」

今日の

17時ちようどから

北にある

エントランスホールで

集会があるんだよ。」

「ええ！？」

アルビスは

かなり驚いた表情を

浮かべた。

なんだそりゃ！？

聞いてねえぞ！

「もしかして、

知らなかったの？

…て、それどころじゃ

なかったんだった！

遅刻してたの

忘れてた！」

それを言うや否や

女性は

その場を走り去った。

よく分からないが

とりあえず急がねば！！

アルビスは反対側の
北エントランスに向け
走り出した。

エファーム総司令部
北エントランスホール

アルビスが
入口の扉の外で、
中の様子を窓から
こっそり伺っている。

先程の女性と共に。

「…であるからして」

あの議長が集会で
演説（？）をしている。

やはり集会は
かなり進んで
しまっているようだ。

そして、
アルビスは
考え込んでいる。

まいったな…、
正面の入口から
こっそり忍び込もうにも
観衆の目の前じゃ
注目的
+ 説教 + 良くない噂
になっちまうし…。

どう考えても
良い案は
浮かんできそうも
なかった。

「あなた大丈夫？
具合悪いの？」
女性が心配そうな顔で
聞いてきた。

「え？
ああ、大丈夫だ。」
アルビスは、いきなり
声をかけられたので
多少驚いている様子だ。

「本当に？」
疑っているのか、
女性は尚も聞いてきた。
アルビスは、
「本当だ。」

ただ…ちょっと

良い策が

思いつかなくて」

と、困ったような笑いを
浮かべながら言った。

「策？」

「ほら、

恥を欠かずに

中に入る方法だよ」

「ん…、

大きな音が何かで

気を

引きつけられれば

忍び込めるかも…」

「大きな音？

…そうか、それだ！」

「えっ？

どついつこと？」

「今、時限型爆竹を

持ってるんだ。

まあ護身用にね。

それをまず

ここに仕掛け

俺達はホールの北側

つまり今いる所の
反対方面に移動し、
爆竹の起爆と同時に
ドアから侵入し、
周囲に紛れ込む。
「どうだい？」
手短に、
かつ自信ありげに
アルビスは提案した。

「良い案ね！
乗った！」
女性はアルビスの
提案に賛同してくれた。

2人は
早速準備を進めた。

マーシリスMS隊

「今回の作戦…、
報告にあつた
正体不明MSと
そのパイロットである
ナイト・レン…。
例え
アイツが出てきても
大丈夫だと言ったが、

本当なのでしょうか？

中佐。」

若い男性、

大体アルビスと

同じ年くらい

だろうか…。

その者は、

中佐に通信機を使い、

話しかけた。

「今回は君の

記念すべき

初陣だったな？

ソニア・

カーネリー曹長」

「ええ。

それが…何か？」

「何事も初めての事には

不安がつきものだ。

だが今は戦争、

我らは兵士だ。

目の前の出来事に

不安を感じていては

己の身を

滅ぼすかもしれん

もっと自分に厳しく、

だ」

「は、はい！」

エファーム総司令部
北エントランスホール

アルビスと例の女性は、
すでに

爆竹の設置を終え、
ホールの北へ
待機している。

「準備は全部終わった。
後は

爆竹が起爆するのを
待つだけだ。」

「どれくらい？」

「今からなら
きつかり3分
3分後に突入する」

「了解」
女性はアルビスに
ウィンク混じりの
敬礼をした。

そして…、

運命の時が迫る。

「あと10秒だ。

9 …、

8 …、

7 …、

6 …、

5 …、

4 …、

3 …、

2 …、

1 …、

「ゼ」

最後の言葉を

言おうとした瞬間、

緊急時代発生！

緊急時代発生！

敵攻撃部隊が

司令部に接近！

繰り返す！

敵攻撃部隊が

司令部に接近中！

数、200！！

うち、MA50数機

MS150数機

上空より接近中！

MS隊並びにMA隊は
直ちに搭乗機に乗り、
これを迎撃せよ！

総司令部だけは
必ず守り抜くのだ！！

ホール内に
動揺が走った。

第5話：策（後書き）

2ヶ月くらいでしょうか？しばらくアイデアが浮かばず四苦八苦してました（汗）。それより、第5話を読んでいただき、ありがとうございます。感謝感激雨霞です（嬉泣）。∴雨と霞はいりませんね。次は第6話です！ご期待下さい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1583f/>

～イノセンス～

2010年10月9日07時18分発行